

## 「つながりを深めるプログラムによる学校改革」

添田町立添田小学校 校長 益田 茂

### 1 出発点

#### 社会力＝つながる力、他者との関係を育む力

様々なつながりが弱くなれば、子どもも親も不満ばかりを口にし始める傾向が強くなる。大人も子どもも学校も家庭も地域もつながることの大切さを再認識しなければ、課題解決は望めない。

\*コミュニティ・スクール = つながりを深めるプログラムの出発点

### 2 学校改革の内容

#### (1) 仮説（経営仮説）

学校教職員がチームとして一体となり、「つながり」を深めるプログラムを積極的に導入していけば、学校・家庭・地域の社会力は必ず向上し、学校を変革することができるはずである。（社会力＝つながる力）

#### (2) 中心となる2つの組織

##### ① 学校運営協議会（学校教育）

・令和2年度にコミュニティスクールの指定申請を行い、令和3年度から正式に学校運営協議会制度（コミュニティ・スクール）を導入した。年間3回の協議会を計画し、学校運営方針説明や中間報告等を行ってきた。地域の方が学校に関心を持っていただき、学校運営委員の方々が地域との橋渡しをしてくださる関係は、教育活動を推進していく上で大変意義深い。学校批判ばかりをしていた地域が、様々な形で学校を支援してくれるようになってきた。

<構成メンバー>

有識者（1）、地域代表（3）、学びっこ教室サポーター（2）、読書ボランティア（2）、PTA役員（3）、学校代表（3）

<役割>

地域住民と学校が、児童の将来のあるべき姿について話し合っていく場であり、具体的実践を共有する場である。つまり、実践者（何らかの形で学校を支援して下さる方）以外のメンバーはいない。主な役割としては、以下の3点とした。

①学校運営への参画 ②学校支援 ③学校関係者評価

学校運営協議会が、学校のスリム化・職員の働き方改革を支援し、豊かな学びの場を生み出してくれた。

<効果>

①評価意識の向上

学校長が、明確な目標を持てる。評価されることに対して、責任を持つ意識が高まる。職員集団の共通理解（共有）が深まる。

②地域の方の意識改革

学校を支援して下さる地域の方々の意欲向上が見込める。

③支援者の増加

学校改革しやすい環境ができる。

<留意点>

- ・地域の自治組織の状況に応じて、学校運協議会の下部組織は編成すべき。組織づくり優先ではなく、『共有』できることを一つずつ構築することが優先。

② 地域学校協働本部（社会教育）

・地域学校協働本部は、「学校を核とした地域づくり」を基本としているため、地域の活力を学校支援に注ぐことで、より一層地域を元気にすることを目的としている。添田小校区においては、地域の教育力が徐々に低下し、少子化とともに子どもを核とした取り組みが減少してきている。そこで、家庭学習支援事業を中心に、地域の存在しているボランティア組織を活用し、新たな学校応援メンバーを募集することにした。「志縁（しえん）」をもとにした組織である。

<学びっこ教室>

- ・低学年への家庭学習支援（宿題の丸つけボランティア）  
週2回（火曜・木曜）14:40～15:20  
毎回8名程度の地域の方が支援

<英峰日進塾>

- ・高学年への家庭学習支援（宿題の丸つけボランティア）  
週1回（水曜）15:50～16:30  
毎回地域の方4名と県立大学生4名が支援

<環境支援>

- ・「We love 添田 project」の実施、親子星空教室への支援  
(PTAとの共催による活動を計画していたが、新型コロナ感染拡大に伴い、2年連続中止)

子どもたちを対象とした支援活動や体験活動は、イベント的なものと共に継続的・常時的な支援活動と併用して行っていくことが大きな成果と達成感も味わうことができる。地域の高齢者の活力は、子どもたちの笑顔が生み出す。

(3) つながりを深めるプログラム

① ふるさと添田プロジェクトの取り組み（地域とのつながり）

令和3年度添田町教育委員会が作成した「ふるさとそえだプロジェクト」を具現化することにより地域との密接な関係を構築しつつある。具体的には、『ふるさと学習』を軸とした体験活動を充実させることにより、地域一体となった取り組みを継続的に行うことができるようになってきた。・・・・・・・・・・資料1 参照

<植樹活動>

- ・地域の森林組合、林業クラブ、地域の木材関連の会社、英彦山神宮等の支援を受けて、英彦山山頂付近に5年生が植樹活動を行った。総合的な学習の時間に添田町の森林について学び、自らの植樹活動を通して『ふるさと添田』をさらに意識することができた。また、6年生は、添田町の町有林にセンダンの木を植し、自分たちが成人する時にセンダンの木を伐採し、学校に加工された机や椅子を寄贈するプロジェクト（絆をつなぐプロジェクト）を実施予定である。



<他の活動>

- ・英彦山調べ（自然、歴史）、地域の史跡や文化財調べ など

②授業改善の取り組み（子どものつながり）

福岡教育大学：鈴木邦治教授の指導を受け、「学びの共同体」理論を校内研究に位置づけ、授業改善に取り組んできた。子どもたち相互の学び合いの学習（[teach other] 効果を引き出す学習スタイル）を現在積み重ねている段階ではあるが、「対話・交流」を軸とした学びをさらに向上させていく必要がある。「学びの共同体」の基本は、子どもたちのつながりをつくり、ともに学び合う集団をつくっていくことである。

③主題研修を軸とした組織運営の取り組み（職員のつながり）

本校の今年度の研究主題は、『主体的に学ぶ子どもの育成』とし、副主題を『学力向上システムによる共通実践を通して』とした。学力向上システムを校内研究の切り込み口とすることで、若手のプロジェクトリーダーたちが連携・協働できる組織となることができた。主題研修において授業改善だけを研究するのではなく、学校全体が一つの組織として機能し、学校全体の学力向上を推進していくことを目指している。各系の長には、若手職員を配置し、学校経営参画意識を高めることにした。結果としては、明らかな学力向上が図られ、職員相互の共通認識がさらに深められている。特に低学力傾向の児童の割合が大きく減少してきたことは、職員の大きな自信となっている。



④学校安全総合支援事業の取り組み（地域・保護者のつながり）

今年度からの町の新たな取り組みとして、学校安全事業に取り組むこととなった。この事業の中核となっているのが学校運営協議会のメンバーである。本事業は、学校・家庭・地域が連携し、組織的に学校安全に向けた取組を推進する体制を構築し、安全教育の充実を図り、児童の安全に関する資質・能力を身に付けることができるようにすることである。具体的には、PTA・地域ボランティアによる、登下校の際の地域見守り応援団の結成を推進していくこととした。保護者や地域住民の方に「子ども見守り応援団」にエントリーしていただき、登下校時の子ども達の様子を見ていただくことが可能となる。実施に当たっては、より多くの地域の方々にかかわっていただけるように、エントリーシートを活用していくこととした。

<見守り応援団の考え方>

見守り応援団とは、不審者に対応するだけでなく、子どもたちの安全全般を見守っていただく方のことです。

子どもたちの生活時間帯をすべて見守ることは難しいので、学校や地域の実情を踏まえ、地域住民のみなさんに協力していただき、できる時間帯から子どもたちを見守っていただきます。

例)

- ・玄関先で ・犬の散歩時 ・買い物の行き帰り ・通勤中 など